

京都大学	博士（ 人間・環境学 ）	氏名	宣 方園
論文題目	日中同形同義語コロケーションの習得における非対称性の影響 —日本語・中国語コーパスの調査と学習者認識の分析を通して—		
(論文内容の要旨)			
本論文は、日中同形同義語（以下、S語）で構成される「名詞＋動詞」型コロケーションに着目し、日中両言語間の用法の非対称性が、中国語を母語とする日本語学習者のコロケーション習得に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。S語は形態と意味が両言語で一致するため、学習が容易とされる一方で、コロケーションでは動詞選択や共起制約が言語によって異なるため、母語知識の転用による誤用が生じやすい。そこで、本論文では、日本語の『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下、BCCWJ）と中国語の『BLCU Corpus Center 漢語語料庫（BCC現代漢語コーパス）』（以下、BCC）を用いた量的調査と学習者の容認度判断調査を組み合わせ、客観的データと学習者の主観的認識の両面から非対称性の影響を検討している。本論文は全6章で構成される。 第1章は、まず本論文の背景および研究動機を述べた上で、先行研究における本論文のキーワードの定義と分類を整理し、その概念の扱いを明確化している。具体的には、日本語と中国語双方の二字漢語について、定義と分類、その割合を整理し、両言語における漢語の対応関係をまとめている。本論文では、意味対応に基づく漢語の分類として文化庁の定義にならい、両言語で意味の一致するS語、意味が一部重なるO語、意味が異なるD語、どちらかの言語に対応する語が存在しないN語の分類を用いている。続いて、英語、日本語、中国語におけるコロケーション研究の定義と分類を概観し、研究領域ごとに対象範囲や捉え方が異なる点を確認した上で、本論文で用いる日中同形語とコロケーションの定義と分類を提示している。 第2章は、先行研究を体系的に概観し、本論文で扱う問題の所在を整理した上で、本論文の目的および課題設定へとつなげる章である。まず、日中同形語の習得に関する研究を取り上げ、意味の習得に関する研究と品詞性の習得に関する研究に分類して整理している。次に、コロケーションの習得に関する研究を検討し、学習者の自由産出文を分析して産出上の誤用や問題点を明らかにした研究と、判断テストを用いて理解における母語知識の影響を検討した研究の二系統に整理している。最後に、言語教育研究においてS語で構成されるコロケーションの習得に焦点を当てた研究を位置づけ、これらの知見を踏まえて先行研究の課題を整理し、本論文の目的と研究課題を設定している。 第3章は、中国語S語コロケーションを対象として、日本語でも同様に成立するかを検証している。具体的には、共起名詞とS語動詞の組み合わせを日本語に直訳し、BCCWJで			

の用例の有無を手がかりに成立の可否を判定した。その結果、中国語のS語コロケーション1,318例のうち、日本語でも成立するものは898例(68.1%)、日本語では成立しないものは420例(31.9%)であった。成立しない例には、同じ意味を表すために日本語では別の漢語動詞に置き換えるべきものや、日本語では和語動詞を用いて意味を明確化すべきものが多く含まれ、S語であっても用法が一致するとは限らないことを明らかにした。

第4章は、日本語S語コロケーションを対象として、中国語でも成立するかを検証している。日中辞典を用いて中国語訳を確定し、BCCでの用例の有無に基づいて両者が一致するかどうかを判定した。日本語のS語コロケーション6,161例のうち、中国語でも成立するものは4,963例(80.55%)、中国語では成立しないものは1,198例(19.45%)であった。成立しない要因として、日本語の動詞を中国語に直訳した場合に対応する自然な表現が見だしにくいもの、あるいは中国語側では重複表現となり文法的に不適切と判断されるものなどが確認された。第3章と第4章の結果を踏まえ、翻訳の方向によって非対称性の現れ方が異なることを明らかにした。

第5章は、中国語を母語とする上級日本語学習者を対象に、日本語S語コロケーションを逐語訳した中国語表現が成立するかを判断させ、非対称性に対する認識を分析している。コーパスでは「日中両言語で同じ共起語がとれる」ものが2,151例(73.9%)、「同じ共起語がとれない」ものが760例(26.1%)であり、後者を非対称的コロケーションとして調査対象とした。学習者は760例のうち478例(62.9%)を「両言語で用法が一致する」と判断し、282例(37.1%)のみを異なるものとして捉えていた。結果の考察により、漢字表記が同じである場合は用法も共通すると確信しやすく、コーパス上に確認できないものであっても、中国語でも成立すると判断されやすい傾向が明らかとなった。

第6章は、第3章から第5章の結果を総合し、教育的観点から非対称性の類型化と指導上の示唆を提示している。非対称的なS語コロケーションには、同一概念を表す際に日中で異なる漢語動詞が用いられる動詞選択上の非対称性があり、語義の対応があっても共起できる語が異なる、あるいは対応する自然な表現が見つからない共起上の非対称性が存在する。学習者が誤用しやすいコロケーションは、共起名詞がN語やD語である割合が高く、対応する表現が存在しないことを強調する明示的な指導なしには正確な理解や産出が困難である可能性が高いことを指摘している。そのため、S語であっても同じ共起語を用いられる場合と用いられない場合があることを明示的に教える必要があることを主張している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者を対象として、日中同形同義語（S語）を含む「漢語名詞＋格助詞＋動詞」型コロケーションの習得における非対称性の影響を、日中両言語のコーパス調査と学習者の認識分析を通して実証的に検討した研究である。コロケーションの習得は言語教育上の重要課題であり、日中両言語の用法差を量的に示すとともに、学習者がその差異をどのように受け止めるかまで射程に入れた点に、本論文の特徴がある。

従来の認識ではS語が語彙単体では習得しやすいためコロケーションの習得も容易であると考えられてきたところ、本論文の独創性と新規性は、コロケーションの分布においては日中間で体系的な不一致が生じうることを両方向のコーパス分析によって可視化した点にある。さらに、学習者が差異を小さく見積もる場合と大きく見積もる場合とで、誤用や回避の可能性が変化しうることを論じ、学習者の認識過程の側面からも非対称性の影響を捉え直した点が評価できる。コーパスによる客観的データと容認度判断調査による主観的データを往還させるという取り組みは本論文の中で一貫しており、コロケーションの非対称性を、分布として捉えることと認識として捉えることを結びつけた点は、本研究の意義として認められる。

本論文が従来の研究と比較して、理論的および実践的に評価できる点は次の通りである。理論的には、日中間の用法の不一致を誤用の列挙に留めず、不一致の類型化と要因の整理を通じて説明可能な形に整理し、そこに学習者の認識を関連づけることで、習得上の困難が生じる局面をより精緻に捉えようとしている点が挙げられる。実践的には、S語コロケーションの差異を明示化した上で、同形性に基づく過剰な一般化など、学習者の判断の偏りに着目し、指導上の支援を検討するための基礎資料を提示している点が挙げられる。日中両言語で意味が同じS語のコロケーションだから学習も容易であるという見通しに修正を迫る点と、指導上の差異の示し方や気づきの促し方といった実践面における教育的意義が裏づけられた点は高く評価できる。

本論文の日本語教育への貢献としては、以下の三点が挙げられる。第一に、日中両言語のコーパス調査に基づき、S語コロケーションの使用実態における非対称性を数量的に示した点である。この定量的分析により、学習者が直面しやすい誤用や習得上の困難箇所を事前に予測するための理論的根拠が提供された。従来、学習者の誤用分析は個別例の列挙に留まりがちであったが、本論文は両言語間の体系的な相違に着目することで誤用発生の要因をモデル化し、誤用の分析や予測、指導に資する新たなアプローチを示している。第二に、S語コロケーションの分類の枠組みを提示し、日中間で不一致となるコロケーションの類型を体系的に整理した点である。この枠組みに

よって、日本語教師は誤用が生じやすいパターンを事前に把握できるようになり、効果的な指導計画を立てるための理論的指針を得ることができる。第三に、学習者のコロケーションに対する判断の根拠と認知的傾向を分析した点である。これにより、学習者がいかなる認知プロセスで誤用に至るのか、その一端が明らかとなった。学習者の判断の背景にある根拠を解明したことで誤用が発生するメカニズムの理解に繋がり、日本語教育における誤用指導の理論に新たな知見をもたらした。以上の成果は、中国語母語話者への日本語教育のみならず、他言語話者との対照的な言語教育研究にも繋がるものであり、効果的なコロケーション指導法の開発や語彙習得研究への発展にも大きく寄与しうる。

一方で、本論文の改善点として、いくつかの課題が挙げられる。たとえば、研究で扱う語彙やコロケーションの範囲が条件によって絞り込まれているため、S語全体への一般化可能性については、その根拠と限界をより明確に示す必要がある。また、学習者調査については認識の一致度の問題が残されており、多段階尺度の導入や文脈提示など、調査の設計の精緻化が課題としてある。しかしながら、以上の課題は、今後の発展的研究において補完、精緻化しうるものであり、申請者が提示したデータと議論は、日中同形同義語コロケーション研究ならびに中国語母語話者の日本語教育研究に対して、実証的かつ体系的な知見を与えるものと評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和8年1月19日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 令和 年 月 日以降